

陳舜臣さんを語る会通信

NO.102 Apr. 2023

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橋雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel.078-911-1671

編集「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2023年4月20日

<http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/>

陳舜臣最晩期の一冊、エッセイ108編『六甲随筆』

本号ではエッセイ集『六甲随筆』（2006 朝日新聞社）を紹介いたします。

日中関係を中心に世界史的視野で「今日」を読み解く、珠玉のエッセイ集。「非攻」を貫いた墨家の思想とイラク派遣、紫陽花の名付け親は白居易、「大安」「仏滅」が生き続ける理由、中国流スマートな賄賂の贈り方、世界最古のコーランはいずこ…、著者ならではの滋味溢れたエピソードが満載（表紙帯コピー）。

『六甲随筆』「あとがき」より転載
小見出し及び傍線は編集委員の加筆

本書誕生のいきさつ

本書は二〇〇三年十月から二〇〇六年三月まで、『朝日新聞』の夕刊に「六甲随筆」というタイトルで執筆したエッセイを集めたものである。ただし、東京など全国版に掲載されたのは、二〇〇五年三月までであった。それ以後のものは、私の地元の大阪本社版にしか載っていない。東京の友人から「なぜやめたのか？」と、問い合わせがあったが、私はなにも執筆をやめたのではない。「あなたの文章を読みたい」という東京の読者のありがたいことばに、「いずれそのうちに、単行本になりますから、そのときにご覧ください」と、お答えしたのである。私としては、その約束がやつとはたせたことで、本書の出版をたいそうよろこんでいる。

一週間に原稿用紙二枚半を一〇八回

一週間に約千字（四百字詰原稿用紙にして二枚半）の文章をかくのが、ここ二年半ほど私の生活のローテーションになっていた。かぞえてみれば一〇八回になっていた。ほとんど掲載時のままの形でここに収録することにした。原則として原稿に忠実で、一字の増減もないように心掛けた。

ただ唯一の例外は、「世界を振りむ

かせた三人」の項である。原稿では、「私たちは三人に感謝しなければならぬ」とあるだけだった。イラクで拘束された三人の日本人のことだが、そのころ、新聞では毎日のように三人の名前が報じられ、周知の事件といってよかった。時間の経過によって、事件は歴史となり、その細部はしだいに忘れられて行く。感謝せよといひながら、その対象をあいまいにしたのでは、非礼にあたるだろう。だから、三人の名を文中に挿入した。

「紫陽花」あれこれ

「奇岩と怪石、武夷三十六峰」の項で、朱熹が隠屏峰の麓あたりに建てた学校の名を武夷書院としたが、一般には「武夷精舍」と呼ばれていたようだ。それはそれでよいのだが、別名を紫陽書院といった記録もある。紫陽花とはあじさいのことだ。「紫陽花、名づけ親は白居易」の項でも記したように、この花は日本原産で、おそらく遣唐使往来のときに唐に伝わったのであろう。だが中唐のころはまだ名前がなく、それではと白居易が名づけ親となったのだ。

（中略）じつはあじさいは、私の住む神戸市の市花である。市花をきめた委員会でも、私もその一人であった。いろんな議論があったが、決め手は日本原産でありながら、セイヨウアジサイといって、外国から逆輸入もしている国際性が評価されたと記憶している。

もしご婦人になにか花をプレゼントしようと思ったときは、相手が花ことを気にする人であれば、あじさいはあまりおすすめできない。あじさいの花ことばは、

——美しいが、かおりもなければ実もない。

——高慢である。

この二年半のあいだ、週に一度の執筆はたのしかった。私は一度も休んだことはなかった。だから各項の間隔は一週間である。ときに二週間あいていることがあるが、それは私が休んだのではなく新聞のほうで休んだのである。題の六甲は神戸の山の名である。むかしは六甲の名を出しても、すこし説明を加えなければならなかったが、いまは阪神タイガース応援歌のおかげで、その必要はなくなった。私はその六甲山を眺めながら、毎週エッセイを書いたのである。

六甲の梅雨に洗われたあじさいを眺めながら

花狸居士 陳舜臣



『六甲随筆』表紙

『泣き虫弱虫諸葛孔明』など。

なお、『墨攻』は、コミック化され、更に、日中韓の合作で映画化されている。

右の画像は、

エッセイ、文中の補足■フビライの時代、南宋帝陵をあばいた妖僧楊璉真加のこと、捨てられた遺骨を集め再埋葬した宋の遺臣林景熙のことなど、この話は、陳作品、『小説 マルコ・ポーロ』冒頭の章「冬青の花咲く時」に出てきます。

自称臣是酒中仙 自ら称す臣は是これ酒中の仙と